

京極高宣・高橋重郷 編集

『日本の人口減少社会を読み解く—最新のデータからみる少子高齢化—』

中央法規出版, 2008年7月, pp.197

新しい時代にふさわしい人口問題の入門書が刊行されたことをまず喜びたい。本書は、現下の日本における主要な社会状況を「人口減少社会」と捉え、そこでの諸問題を人口学的な観点から、最新の統計データを用いて簡潔に解説したハンドブックである。

本書では、最初に日本の人口減少社会の到来について概観を試みたあと、それをもたらした人口学的要因、次いで社会経済的要因についての分析を行なう。そして、それらの要因がどのようなメカニズムにより人口減少を引き起こすことになったのか、人口減少がどのような社会経済的な影響を与えているのかについて考察を加えた後、最後に世界の人口動向と国際人口移動との関連において人口減少の問題点を論じている。

全体は以下の9つの章から構成されている。すなわち、人口減少社会の到来(1章)、日本の少子化(2章)、諸外国の少子化(3章)、少子化の社会経済的背景要因と対応(4章)、少子化とリプロダクティブ・ヘルス(5章)、長寿化(6章)、人口変動の人口学的メカニズム(7章)、少子高齢化・人口減少の社会経済的影響(8章)、世界の人口と国際人口移動(9章)である。各章は平均5つの項目をとりあげて、各項目3~4ページのスペースをとり2つの図表を掲げ解説を行なっている。

もともと、新聞と雑誌に掲載したものが原型となっているとのことで、解説は解りやすいうえに、最近の興味深いデータが工夫をこらして図表化されているので大いに理解の助けとなる。各図表にはデータから読み取れる要点を「ポイント」と題した短文で示している。また、項目により「用語解説」のボックスを挿入して初心者への便をはかっている。このように、一般の読者を意識したハンドブック形式の編集がなされているのが、本書の第1の特徴である。

第2の特徴は、通常的人口学や人口問題の解説書とは異なり、本書が人口減少社会の諸問題の中から項目ごとに1つの問題を取り上げていて、いわば問題指向の構成をとっていることである。人口分析のテキストのように、人口変動要因としての出生、死亡、移動の分析から始まって人口増加、将来人口推計に至るといった伝統的な構成に従っていないので、本書では人口学の体系との関連づけが明確でない点はやむをえない。

例えば、「合計特殊出生率」あるいは「人口高齢化」についての解説を本書の中で見つけようとすると、見出し語としては出ておらず、そのうえ2つ以上の項目にわたって記述されていることもあるので、初心者は戸惑うかもしれない。この点は、再版の折にでも専門用語の簡単な索引を付けることにより改善できるので、本書の利用価値はもっと高まるであろう。

第3の特徴は、国立社会保障・人口問題研究所の中心的な人口研究者13名が各項目の執筆を分担していることである。それぞれの専門分野の研究について学界で実力が認知されている研究者が、最新の研究成果にもとづいた解説をしているので読者は安心して説明を受け入れることができよう。なお、本書の巻末には1990年から2007年に至る関連年表が10ページにわたり掲載されていて、最近における人口減少や少子化の動き、政策の推移などを知ることができて便利である。

章によっては(5章, 9章)、参考文献や注記が挿入されているが、ほかの章でも基本的な参考文献等を挙げてほしかった。13人もの研究者によって執筆されているため、各項目の文体、記述方法、分量などにいくぶん不統一が見られるのが残念である。また、不用意に説明なしに専門用語(例えば、年齢調整死亡率)が出てきたり、人口学特有の記述の仕方(例えば、出生途上にある夫婦、出生が結婚内で生じる)が出てくる点も気になる点である。とはいえ、本書は、全体としてはよく編集されていて、見かけ以上に高度な内容を含んでおり、研究者好みの優れた解説書になっていると思う。

(嵯峨座晴夫/早稲田大学名誉教授)